シナ中世貴族政治の成立について

川勝義雄

【梗概】中國史上、中世という時代區分を立てうる一要因として貴族政治があげられる。その起源を尋ねることが本稿の課題である。從つて中世初期の魏晋貴族の成立を問題の焦點とする。それは先ず系譜上漢末清流勢力より出る。そこでこの清流勢力の構造と三國時代までのその發展を解明し、それが魏晋貴族へ如何につながるかを明かにせねばならぬ。漢末全國的な力をもちえた清流勢力の構造は、よつて立つ原理として儒家的國家理念をもち、それによる士大夫の廣汎なる輿論を背景にして、それに支持される代表的士大夫が相互の連絡を保ちつゝ首腦部を構成するという形で理解される。それは原理と組織とをもつ統一體である。故にその力は君主から上から出るものでなく、士大夫の輿論から下から出る。それは又その理念よりして現實の軍閥國家を越えた普遍性をもつ。魏晋貴族はその代表者を中核として成立する。故にそれは、ひいてシナ中世貴族はこれと同じ性格を内包する。

序言

中國史上において魏晋南北朝より唐末期に至る所謂中世なる時代の特徴的な現象として貴族政治があげられる。而してその性格たるや、「政治は貴族全體の專有ともいうべきもの」であり、「君主は單に貴族の代表的位置に立つ」にすぎず、「政治は君主と貴族との共議體」であつたといわれる。(1) 卽ちこれらの貴族は、我が平安時代において藤原氏という一貴族が壓倒的なる勢力をもつた如き形でなく、多

數の貴族が全體として政治を專有する。更にそれは中世ヨーロッパや日本における如く、多數の封建領主による政治形體でもない。シナ中世貴族は單に地方の名望家たるにすぎぬ。然らば中國における中世貴族の全體的政治關與は如何なる形でなされたか、單なる名門の集合としての貴族が、その政治關與に當つて君主をもその傀儡的存在と化せしめる底の政治力を如何にして獲得したか。その爲には單なる集合でなく、何らかの形における貴族全體の統一が豫想される。その統一は、その團結の紐帶は如何にして生じたか。この問題を中世初期、魏晉貴族の成立において幾分か究明したいというのがこの小論の目的である。これによつてシナ中世貴族政治の本質も多少明かになりはしないかと思う。

然し先ず、今ここにおいて取扱う貴族とはいかなるものをいうかについて明確にしておかねばならぬ。貴族とは地方の名望家であるといわれる。卽ちそれは地方の豪族である。漢代以來の豪族とは、その鄕里に於て宗家を中心としてその周りに多くの宗族とそれに附庸する賓客、部曲等を以て成る宗族團の謂であつて、(2) 廣大な土地を所有し、鄕曲に絕大な勢力をもつ集團である。然らばかゝる宗族團の長、又はかゝる集團の力を背景にもつ宗族員を貴族というのであるか。然し豪族必ずしも貴族ではない。それが地方の名望家となり更に貴族となる爲には、それに高貴性を附與する何ものかが加わらねばならぬ。それは卽ち官位であり、政治權力によつて保證される身分上の高貴性である。豪族は純粹に社會的な概念として把えうる。然し貴族なる概念には、それに政治的色彩が濃厚に加わる。極端に云えば、貴族とは本來政治的概念であるともいえるであろう。豪族と貴族とは必ずしも相掩う概念ではない。貴族なる語を單に特權階級の同義語として使うことは、事柄に混亂を來たすであろう。この二つの語は嚴密に區別して使うべきではないかと思う。

とはいえ、實際に存在するものは、一面地方社會における勢力者として豪族であり、他面高貴なる官職をもつものとして貴族である。これが解明には前者の面よりする究明は不可缺であるというまでもない。がここでは一應その

面を捨象して、後者の面、即ち政治上の高貴性を荷うものとしての貴族の面を中心として論じてみたい。從つて政治力の強いこと、具體的には中央政府の要職にあつて累代國政に大きな發言權をもつことを以て貴族としての資格と目し、それに視點を集中してその性格を論じてゆくこととする。

一、魏晋貴族の系譜

魏晋貴族の成立を考察するに當つて、先ず曹魏政府首腦者をとりあげ、その系譜をたどることから始めよう。

曹操の北支那統一に際して最も大きな寄與をなし、功臣第一と稱せられた荀彧、及び功績これに次ぐ荀攸は、共に潁川の荀氏として祖父の代以來漢末清議の徒の中心的人物を輩出した一家に屬する。[3] 殊に荀彧は士大夫として最も早くより曹操に協力し、多數の俊賢を推挽してその政府建設の基礎を置いた。彼によつて登場して來た人物は、以後殆んどすべて曹魏政府の臺閣に列し、更にその多くは魏晋を通じて世々高官の地位を保ちつづける。[4] 而してそれらの人物中、鍾繇・陳羣は荀彧の祖父荀淑と共に、嘗て潁川における清流黨の領袖たりし鍾皓・陳寔の孫である。[5] 更に華歆・王朗・崔琰等は北海の清流黨と考えてよく、有名なる汝南月旦の評をなした許氏一族と交友關係にある。[6] このことを更に總括的に見るために萬斯同の魏國將相大臣年表所載の人物を點檢するならば、左表の如くその文官の中の多數は、この潁川及び北海を中心とする清議の人々、又はこれに關係の深い人々である。

曹魏政府の陣容がかくの如きものである以上、それは漢末黨錮の禁によつて彈壓せられていた清流黨が、後漢政府の壞滅によつて復活し、曹操に協力することによつて新しい秩序の形成に努力したものと考えて差支ない。そしてこの曹魏政府首腦者による政治方式から、以後の中世貴族政治が始まるとすれば、曹魏政府首腦者達を生み出した漢末

（A.D.213）
（建安十八年魏國初建）

郎中令　袁煥（華歆と友）
太　僕　國淵（北海派）
（建安廿四年臺閣に列せる人の中、十八年以後に登位せる人）
御史大夫　華歆（北海派）
太　常　王朗（華歆と友）
大　理　鍾繇（潁川派）
大　農　王脩（北海派）
少　府　謝奐
尚書令　荀攸（潁川派）
尚書僕射　凉茂
尚　書　毛玠
崔琰（北海派）
常林
徐奕
何夔

侍　中　王粲
侍　中　杜襲（荀彧に推擧さる）
衛覬
和洽
大鴻臚　張太
中　尉　楊俊
尚　書　桓階
陳矯（陳羣に推薦さる）
侍　中　陳羣（潁川派）

回右傍に。を附した人は後貴族となる家を示す
回表中（　）を記せるものは史料に明白な記述あるもののみで、その他の人々の大多數も亦清白の人として清議の徒と解し得る。

清流勢力の構造は更めて檢討しなければならない。

二、漢末清濁二流の對立

漢末桓帝の延熹九年(A. D. 166)に黨錮事件として激發したところの所謂清流對濁流の衝突は、その起源をどこに持つであろうか。普通に黨人の議は桓帝卽位當初における甘陵南北部の對立に始まるとされる。[7] 二人の學者を中心として政府派對在野派に分れて黨派を作つて抗爭したのはこれが最初であるかもしれない。然しながら甘陵という如き限られた一地方の猶お私的な色彩を脫しない對立を以て、かの全國的な二大分裂の起源とすることはできない。清流黨の團結の基盤たる清議卽ち士大夫の輿論は、岡崎博士の言われる如く政府の選擧腐敗に基づいて捲き起されたものであつた。[8] 政府に蟠踞する一部の外戚貴族と、それに結托する腐敗官僚達の選擧界攪亂が、鄉黨の輿論を無視する結果となつた爲に、鄉黨の士大夫は彼等自身の正當な價値基準によつて更めて人物批評を行う方向をとつた。清議はここから起る。而して一部貴族の選擧界攪亂、更に一般的に言つてその政界攪亂は、多かれ少かれ後漢初期から見られる現象であつて、その根ざすところは深く且つ遠いといわねばならぬ。こうして官界に於ては選擧を始め、一般政務を溷濁するものとこれを阻止せんとするものとに分れ、鄉黨に於ては、前者を利用しこれに阿附するものとこれに反撥するものとに分裂する。對立はかくて官界民間を通じて全國的となつて行くのである。

ではこの清流勢力の、當時猛威を逞しうする外戚宦官一派卽ち濁流勢力に對する全國的な對立はいかに理解するのが適當であるか。この兩勢力の夫々に於て、根幹となり實際上の力をもつものは何れの勢力に於ても豪族である。ここに於て楊聯陞氏の如くこの對立を豪族群の對立として理解し得る根據がある。[9] 然しかような見方が餘りにも豪族というものに目を奪われすぎていること、清議の士の地盤は、あくまで豪族そのものにあつたのでは斷じてなく、清議そのもの、換言せば族組織を越え、地域の遠近を越え、身分階級の如何を問わぬ所に支持せられる輿論そのものにあつ

たことが既に指摘せられている。[10] 誠にそこに於ては單なる家と家、豪族と豪族との私的利害による對立さえも輿論の前に引き出され、その判定により夫々の家は清濁何れかの立場へ引きずりこまれるのである。[11] 然もこの輿論の形成の上に、又その推進の上に大きな役割を演ずるものは單に豪族或は地方の名望家だけではない。明らかにそれに屬しない人人も亦大きな寄與をなす。この事も既に指摘された所であるが、[12] 今具體的な例をあげるならば、代表的な黨人陳寔は明らかに豪族ではなく單微の出身である。[13] 又代表的な黨人達に最も畏敬された黄憲は貧しい牛醫の子であつた。[14] 李膺らと並んで八俊と呼ばれた黨人魏朗の如きは、復讐殺人によつて故郷會稽を亡命し、陳國及び京師に於て學問した人であつて豪族的背景は全然もつていない。[15] その他後漢書卷八十三の處士傳及び卷九十七の黨錮列傳中には貧家の出身者が相當に存在する。これらの貧家出身の士大夫は清流勢力の大きな要素として働らき、決して豪族や名家に驅使されているものではない。豪族も非豪族も一つの理念的な基盤をもち、廣汎な輿論の上に統一されて、これによつて天下を半分する大きな勢力となつているのである。では次に清流黨の構造をより詳しく考察してみよう。

三、清流勢力の構造

上述の如く清流（濁流）の對立は單に豪族群の對立抗爭として把えるだけでは眞相を把握出來ない。先ずそれは、清流の立場からすれば、歪められた國家の在り方に對する正常なる國家意志の鬪爭という理念的内容をもつ。では一般に當時の士大夫は正常なる國家の在り方を如何なるものと考えていたであろうか。

安帝の頃、滔々たる官界の腐敗の中に仕進を阻まれ、獨り耿介として俗に同ぜず、遂に終生官に仕えなかつた純粋な士大夫王符は、正常なる國家の在り方を、尚書の「天工人其代之。王者法天而建官」という句の中に求めている。[16] 後漢書注家李賢は、この句の注釋として尚書本文及び孔安國注を引いている。孔注は晉代の僞作であるというのが今日學界の定説であるから、[17] 後漢の士大夫はこれによつて尚

書を讀んでいたのではないが、その解釋には大差ないと見てよかろう。今吉川氏の正義本による譯によつて李賢の注を譯してみよう。「尙書咎繇（皐陶）謨には『亡曠庶官。天工人其代之』とある。『天工人其代之』とは孔注によれば、『人は天に代つて官を治めるという意味』になるのであつて、官は天の官なのである。人は『天の官であるものをば、その才能のないものに勝手に與えてはならぬ。』又尙書（說命篇中）に『明王奉若天道。建邦設都』とも言つている。孔注によれば、『天には日月北斗五星二十八宿があつていずれも尊卑が正しあう掟が見えている。明王は（この）天の道（卽ち秩序）に順いまつりつゝ國を立て都を設け（ねばならぬ）』の意である」。卽ち地上國家に王たるべきものは、整然たる調和を保つ天界を、その國家秩序の模範とせねばならぬ。これと全く同じ思想が、一貫して累代官僚的性格を保持しつゞけた楊氏の一人楊秉によつて表明されている。[19] 彼らの思想に於ては、國家とは天界の秩序の地上における再現であり、從つて國家は全世界の上に立ち、全世界は一つの國家でなければならない。全世界を掩う唯一つの秩序ある國家が唯一つの秩序ある天界に對應する。北極星の下にあらゆる天界の星が尊卑の階級的秩序を保ちつつ統率されているように、地上の國家も亦天子の下にあらゆる官吏及び庶民がその階級的秩序を保ちつつ統率されねばならぬ。そして地上における秩序維持の原理が禮に外ならない。[20] 地上の國家が天界の秩序の裏付けをもつという壯大な普遍的國家の理念は、原始儒家以來の——殊に董仲舒によつて完備されたものであるが、[21] これが後漢時代の士大夫の指導的な考え方であつた。外戚鄧氏に對して毅然たる態度を持した陳忠の上奏文に言う「三公の位は上は天の三階に則る」[22] という如き言い方も同じ思想からくる。彼らが國家或は人臣としての在り方を論ずる際、その議論の立脚點は常に右の如き國家觀に歸するものであつた。上述の如き議論は儒家的教養の上に立つ士大夫のおきまりの修辭法として簡單に看過してはならない。假令さような傾向があるとしても、その事はかゝる國家觀が常識となる程に指導的であつたことを意味し、又殊に淸節ある士大夫の間に强調されている點を注意すべきであろう。

かような國家理念をもつた士大夫にとつて、君主の大權は當然天子以外の者に掌握されてはならぬ。爲政者は常に秩序維持の原理たる禮を守るべきものとされる。然るに實狀は、「政權は外戚の家に移り、寵愛は近習の豎に注がれ、彼らはその黨類を親しみ、その私人を用い、これらの輩は內は京師に充ち、外は諸郡に布列して、賢愚さかしまに、選擧は貿易され、無能者が邊境を警備し、貪殘な者が民を治めている。その結果民情は騷然となり、異民族は忿怒し、乖叛を招き亂離の狀甚だしきに至つた。[23]」かくては「上、天の意志に順はず、下は天の愛育する人物を育てず、利己的な狡智のまゝに竊かに君威を弄して天地に戾り、宇宙の原理を欺瞞しようとする。[24]」ここに於てかゝる「佞邪の輩を斥け、淸廉にして高節ある人士を拔擢し、」國家を正常なる狀態に引き戾し、その結果「天は上に調和し、地は下に於て君威洽く、慶福の兆遠からずして至る[25]」如き本來の姿を招來せんと努めることは士大夫の使命とならねばならぬ。これ卽ち君主權の行使を歪め、正常なる國家を崩壞せしめんとする濁流勢力の動きに對して、明らかに反對の立場を取る淸流勢力の理念的基礎を示すものである。換言せばそれは右にのべた如き普遍的國家の理念であり、淸流士大夫の行動が正常なる國家意志に基づくことをはつきりと示すものに外ならぬ。そしてこの普遍的國家否定への動きが强くなればなる程、逆にこれを阻止せんとする立場も明確となり、代表的士大夫達は共通の立場に於て自然に政治的黨派としての色彩を帶びる如き相互の團結を持つようになるのである。

さて次に淸流勢力のもう一つの大きな地盤たる輿論について少し考察してみよう。學問の淵叢たる京師の太學に於ては後漢に入つて學生の數は次第に益し、本初元年（A.D.146）には三万人に增員されたけれども、その頃より學生達は漸く旣成の煩瑣的學問に興味を喪失し、多くは浮華を尙び談論を重んじ交際に務める風潮が盛んとなつていつた。[26]そして彼等の談論は彼等の修得した儒家的敎養の上に立つて、時の政治に對する批判と人物に對する評價とに向う。更に學問は後漢中葉以後漸く天下にゆきわたり、各地方に於て學者は各々諸生を聚めて敎授している。[27]河南省中部の潁川、汝南

及び山東省北部の北海は學問の地として殊に著名である。[28]そしてその學問も片々たる章句に拘泥する傳統的學問とは行き方を異にしている。學問は以前の秘授相傳的煩瑣學の殼を破つて、眞に學問的な古典解釋學を打ち樹てんとする傾向にある。[29]その傾向は遙かに解放的であり、自由討論の機會が增したことは充分に想像しうる。然も猶一般士大夫の思潮はかような純粹な學問の樹立に留まつてはいなかつた。新しい古典解釋學の泰斗たる北海の鄭玄でさへも、その純學問性の故に、大志を抱いた諸生邴原——後に曹操時代に隱然たる名望を士大夫の間に獲得した人である——にとつては猶慊りないものに思われた。[30]卽ち當時の教養ある士大夫の思潮は更に急進して、積極的に現實の政治に働らきかけ、これを改革せんとする實踐的意欲に燃えていたと言つて差支ない。前述した所の選擧不實に基づく鄉黨の不滿、更にそれから起つて來た所の鄉黨士大夫自身による正しい人物品題の風が、右の如き學生の風潮と相關聯し、ことに京師の太學生及び諸郡國の諸生を中心として全國的な輿論が構成されることになつた。

儒家的教養を修得した學生の政治批判は、當然儒家的國家理念を蹂躙する外戚及び宦官らの濁流一派に向けられ、又鄉黨の輿論は元來一部貴族及び宦官の壟斷に對する不滿より發したものであるから、この全國的な士大夫の輿論は、あげて國家主權を歪曲する濁流に鋒を向け、儒家的國家理念に忠實な官僚に共鳴し、彼らの濁流に對する鬪爭を支援する。かくて輿論は共同の排除目標をもつことによつて充分な統一を保ちつゝ、清流勢力の最も大きな地盤となる。

そしてかような統一ある一つのサークルに於て、政府の任命或は選擧とは別個に、正しい儒家的價値基準によつて彼ら自身の人物評價を行い、人物の番付をする。[31]政治と道德とが緊密に結びついていた漢代においては、官吏は人格者でなければならず、逆に人格者は當然官吏となつて庶民の教化に當るべきであるというのが一般の考え方である。[32]然るに一般輿論が政府とは別個に人格者の番付を行い、彼らの代表者を指定する如き行爲に出ることは明らかに政府を見棄てることを意味する。それは恰も現在の在野政黨が次期政權の獲得を予想して、內閣に登るべき人々を大體準

備しておく事情に似ている。そしてこれらの代表者の一人である陳寔の葬儀に際しては會葬者三萬と稱せられ、郭泰の葬儀には遙々太原まで陸續として會葬者が集まつて行つた。[33]

以上、輿論を荷う多くの士大夫が一つの統一あるサークルを構成したこと、そしてその統一は儒家的國家理念に基づき、且つ共同の排除目標を持つたことによつて却つてそれが強く維持されたこと、更にそのサークル内部では名聲という形で彼らの代表者が指定されていたことをのべた。これに加えて清流勢力の統一を更に鞏固にしたものがある。それはその構成員相互の人間關係に外ならない。次にそれをのべよう。

先ず輿論によつてその代表者と指定された名聲ある士大夫達は、相互に師友關係をもつている。清流勢力の首腦部は緊密な人間關係によつて強く結びついていたのである。[34]更に廣い人間結合の仕方として漢末に於て殊に顯著に見られる門生故吏の關係がある。廿二史劄記「東漢尚名節」の項にあげられている人々を始め、所謂門生故吏の行爲は、自分の爲に官職を斡旋し、或は自己の人格を認めてくれた人に對して長く恩義感を失わず、死の危險を冒してもその人の爲に奔走し、その人が處刑された時は禁令を犯してその死骸を收容し、その子孫を保護しようとする。[35]これは正に一種の主從關係であり、官職の斡旋或は人格の確認を媒介とした主從關係であると考えてよかろう。かような堅い恩義感に基づく行爲は絶大な稱讃を博し、その結果唯々名を得るためにのみ僞善的にかゝる行爲を行つた例も多々見られる。然しかゝる恩義感に忠實であることが當時名節あることとされた以上、清節を以て自己の矜持となす清流士大夫の間に、それが殊に顯著に現われることは當然である。卽ちかような堅い恩義感、いわば一種の主從關係の存在は、清流勢力の團結を益々堅くしていたと考えてよい。後に三國の時、有名な諸葛亮の劉備に對する關係は正にこれであり、それは兄諸葛瑾に對する肉親關係よりも強いものであつたのである。[36]

右の如く清流勢力の構造は、政治的には共通の儒家的國家理念、人間的には共通の儒家的道德感情に基づく廣汎な

る輿論――その代表者の指定――代表者相互の連絡という形で把えられる。かような構造をもつた清流勢力は、それ自身の原理をもち、連絡と組織とをもつた一つの統一體であると考えてよかろう。そしてこの清流士大夫團の中心勢力として最初に潁川における清流グループが存在し、次いでそれと平行して北海のグループが有力な存在となつてゆく。この兩グループは相互に密接に連絡し、後には全士大夫の支持を背景にその指導的役割を果すのである。[37] こうして自己の中心をもち、いわばその周圍に一つの圓を構成した士大夫團は、他方政府を中心とする現實的な國家の作る圓とは重なり合いながらも猶お相當のズレを生じた。そして歴史は、この重なりつゝもズレている二つの圓が、夫々別個に廻轉を始め、政府の圓は次第に小さく、清流勢力の圓は次第に大きくなるという形で理解してよいのではなかろうか。

四、清流勢力より魏晋貴族へ

黨錮事件に於て政府は清流勢力を彈壓した。それはこの兩者の決定的な訣別、即ち上述の二つの圓の別個の廻轉を意味する。右の如き構造をもつ清流勢力は一部首腦者の追放或は處刑によつて破壞されはしない。難を免れた潁川の陳寔一家を中心に續々と新しい名士が養われて新しい連絡を生じ、[38] 又地下に潛行した黨人何顒は積極的に豪傑と交結し、後の軍閥の首領とも關係をつけている。[39] 廣汎な擴がりをもつ輿論は猶更絶滅出來るものではない。熹平元年竇太后の死を契機として、宦官を非難する落書が京中に現われ、學生千餘人が逮捕されたという事件は、[40] 社會の底に渦まく輿論が偶ゝ頭をあげたものに外ならぬ。まして濁流宦官に占據された政府の行爲が益ゝ亂脈となるにつれて、士大夫は愈ゝそれから離れてゆく。濁流から離れるということは即ち清流に入ることに外ならない。何とならば漢代における政治的立場は、唯ゝ儒家的國家理念に忠實であるか否かによつてのみ定まるのであつて、儒家的教養に培われた士大夫階級が政府に於て、もはやその政治的矜持を保ち難い事情に立ち至つたとき、同一の教養の上に立ち、同一の國

(A. D. 172)

家原理を明かに標榜する政府外の勢力に同調するのは當然である。この士大夫階級の政府離脱は、それを官僚として包攝し、それに百般の政務を委任することによつて國家統治をなしてきた後漢政府は急速に無力化する。そしてその政治力の空隙に、帝國軍隊及び武裝農民を掌握した多くの軍閥と、今や殆どすべての士大夫の統一體となつた清流勢力——全士大夫團ともいえよう——とが有力な存在として殘るのである。

尤もこの漢末の大混亂期に於て兵力こそ唯一の頼るべき力ではあつた。兵力を殆ど持たない一般士大夫は忽ち身の置き所に苦しみ右往左往し始める。多くは一族をあげて避難を開始し、[41] この間にあつて大量の士大夫が沒落していつたと考えられる。[42] 士大夫階級にとつては確かに受難の時期であつた。然しながら地方に割據する軍閥が自己の地位を維持し强化せんとして、支配下の地域の安定を欲する場合、或は他の軍閥に對抗する爲、軍略についての參謀を得んと欲する場合、政治家的教養を積んだ知識階級たる士大夫は軍閥にとつて重要な存在となつてくる。ここに於て既に全國的な名聲を得ている代表的士大夫は勿論、地方に於て多少とも名を知られた士大夫は漸次各軍閥の傘下に集まる事となつた。この間にも軍閥相互の戰いは續き、弱者は强者に併呑され、多くの小軍閥は大軍閥の下に統合され、結局三國鼎立の狀態となるのである。而して士大夫の大部分、殊に士大夫團の中心的存在即ち潁川及び北海のグループは魏の傘下に入つたが、猶吳蜀の中へもその一部は入つて行つた。諸葛氏一族は夫々三國に於て最高首腦部となつていたし、[43] 代表的士大夫許靖は蜀に於て、張昭は吳に於て夫々最高の地位を占めていた。[44] その上これらの各國に分屬せる士大夫の間には依然として共通の感情が失われず、相互の連絡さえも保たれている。[45] 彼らはその屬する軍閥國家の對立抗爭を越えて連絡を維持していたのである。即ち所謂士大夫團の圓は、互に排除し合う三つの軍閥國家の圓の底に夫々の部分を包む第四の圓を構成していたと理解してよかろう。

清流勢力——その發展としての全士大夫團は漢末の大混

亂期に於てもその統一性を失うことなく、大きな潜勢力として存在し續けた。それは後漢政府崩壞に伴う新しい軍閥政府の中に嘗ての統一をそのまゝ維持しつゝ登場してくる。第一章にのべた如く、殊に魏に於ては潁川グループの領袖荀彧を中心として、嘗ての潁川・北海の清流グループはスクラムを組んで登場する。そしてこれらのグループの外廓には、多くの名士卽ち士大夫の輿論に於て名聲ある代表的士大夫が附加している。これらの代表的士大夫の家から魏晉貴族は生ずるのである。但しこれらの家のすべてが貴族となり得るわけではない。或る家が永續して貴族となり、他の家は斷絶或は沒落するに至る理由には樣々の複雜な事情がからむ。今はその一々についてのべる餘裕はない。然しそれらの問題は魏晉貴族成立の第二の段階に屬する。今は魏晉貴族を生む母胎が清流勢力にあること、從つてその性格は清流勢力の構造から深く規定されていることを指摘するに止める。卽ち「輿論——その代表者の指定——代表者相互の連絡」という清流統一體——その發展としての全士大夫團の構造からして、その代表者は強く輿論に支持されて出て來たものであり、魏晉貴族がこの代表者を以て始まる以上、これまたその背景に士大夫全體の輿論によつて支持されているという性格をもつ。而もその輿論は前述の如く儒家的教養——後には單に儒家的でなく文化至上主義的とでもいえるものになる[46]——の上に生じた結果、當初より特殊なる軍閥國家を越えた超國家的普遍的立場に立つ。卽ち魏晉貴族は君主からの、上からの保證によつてでなく、士大夫の輿論からの、下からの保證によつて成立しているのである。從つてこれらの貴族は王朝の交替を超越して存續する。崔氏・盧氏・裴氏の如く中世全般を通じての貴族さえ見られるのである[47]。これは魏晉貴族、延いてはシナ中世貴族の注目すべき性格であろう。

因みに後漢に於ても既に貴族は存在した。趙翼が「四世三公」としてあげた袁楊二氏[48]の外、外戚及び雲台二十八將の家には貴族として取扱つてよい家がある[49]。然しその出現に當つては、後漢創業の君主劉秀との個人的關係によるもの[50]又は地方において個々別々に劉秀に協力した結果登場して來たものであつて、未だ魏晉貴族の如くその背後に明白

且つ強力な統一を以て出現したのではない。それは未だ猶王朝に依存する。從つて後漢王朝と共に滅んでしまうのである。然し魏晋貴族の出現に當つては假令曹操ならざる他の何人が政權を取つても、既述の如き團結をもち、無視し得ざる勢力を形成していた以上、その出現は必然的であつたといえよう。魏晋貴族を以て中世貴族の成立を考察した所以である。

結び

以上シナ中世貴族の成立を魏晋貴族の成立に於て考え、その成立の第一段階としてその母胎たる漢末の清流勢力の構造及びそれによつて規定される性格について述べた。然しながら魏晋貴族の成立には未だ必ず言及すべき多くの事柄が殘されている。九品中正制度の如きはその尤なるものであつて、そのもつ意味は更めて檢討すべきであろう。然しそれらは魏晋貴族成立の第二段階として次の機會に述べたい。

註①内藤湖南「概括的唐宋時代觀」（「東洋文化史研究」所收）

②宇都宮清吉「漢代に於ける家と豪族」（史林二四卷二號）參照

③三國志卷一〇荀彧荀攸傳及び後漢書卷九二荀淑傳參照。この後漢書卷九二は潁川の清流首腦者達の傳である。

④三國志卷一〇荀彧傳の末の裴注所引彧別傳に荀彧のあげた名士が列記されている。それらの人々の以後の家系は史姓韻編及び各傳を參照されたい。

⑤後漢書卷九二鍾皓、陳蹇傳及び三國志卷一三鍾繇傳同卷二二陳羣傳參照

⑥三國志卷一三華歆、王朗傳及卷一二崔琰傳參照。北海清流黨については第三章及び註（37）を參照されたい。尚三國志卷三八許靖傳の末に

始靖兄事潁川陳紀。與陳郡袁煥・平原華歆・東海王朗等親善

とある。許靖は從弟劭と共に汝南月旦の評をなした人である。

⑦後漢書卷九七黨錮列傳序參照

⑧岡崎文夫「九品中正考」（「南北朝に於ける社會經濟制度」所收）參照

⑨楊聯陞「東漢的豪族」（「清華學報」卷一一）參照。

この中で楊氏は「前後二十餘年の黨爭を總看するに、情勢甚だ

複雑なるも是は清流獨流二つの豪族集團が政治的地位を爭取する爲の死を賭しての戰である」、と言つている。尙拙論に於ても楊氏に倣つて「清流」・「濁流」という言葉を使用した。

⑩宇都宮先生の陳嘯江「魏晉時代の『族』」及び楊聯陞「東漢的豪族」に對する書評（東方學報京都第九册）參照

⑪後漢書卷六一蘇不韋傳に扶風の蘇氏と李暠一派の私鬪のことが見え、これをめぐる世の批判に清議の士郭泰（輿論に大きな影響力をもつた人である）が一役買つていることが記載されている。

⑫宇都宮清吉前掲書評

⑬後漢書卷九二陳寔傳參照

⑭同卷八三黃憲傳參照

⑮同卷九七魏朗傳參照

⑯同卷七九王符傳及そこに引かれている潛夫論貴忠篇參照

⑰吉川幸次郎譯「尙書正義」第一册「譯者の序」參照

⑱右の譯參照。尙（　）內は筆者が補つた。

⑲後漢書卷八四楊秉傳中記載の上疏參照

⑳漢書卷二二禮樂志序參照

㉑重澤俊郎「周漢思想研究」參照

㉒後漢書卷六九劉愷傳參照

㉓同卷七九仲長統傳所引「昌言」法誡篇參照

㉔同卷七九王符傳所引潛夫論貴忠篇參照

㉕同卷九六陳蕃傳に記載の上疏參照

㉖漢書及後漢書儒林傳序參照

㉗趙翼「陔餘叢考」卷一六「兩漢時受學者皆赴京師」の項尾參照

㉘潁川については後漢書卷九二記載の各傳參照。ここに學びここに於て認められることが如何に大きな名譽であつたかについては三國志卷一一管寧傳所引先賢行狀に王烈のことを記した所を參照されたい。汝南には黃憲、袁閎、許劭等が居り、北海には大儒鄭玄がいる。

㉙岡崎文夫「魏晉南北朝通史」外篇第一章第七節參照

㉚三國志卷一一邴原傳注所引「邴原別傳」參照

㉛後漢書卷九七黨錮列傳序參照

㉜官吏任用に當つて孝廉或は方正という道德的な科目が重視されたのはそのことを示す。

㉝後漢書卷九二陳寔傳及び卷九八郭太傳參照

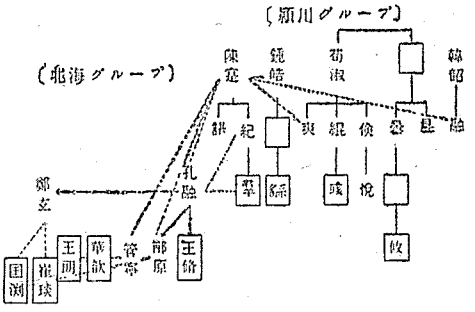
㉞李膺は荀淑・陳寔と師友關係にあり（李膺傳）、黨人李睦は郭泰、朱公叔等と友であり（李睦傳）、何顒は郭泰、賈彪等と親

交がある（何顒傳）。

㉟後漢書卷九三李固傳附李燮傳等も參照

㊱三國志卷五二諸葛瑾傳注所引「江表傳」參照

㊲潁川グループは潁川の荀氏、潁氏、陳氏を中核とし、北海グループは北海の大儒鄭玄及び北海相孔融を中心とする。この兩グループは地域の別によつて生れ、思想的對立は存在しない。その關係を表によつて示す。



——は家系を示す。

……は師友關係を示す。

大體上列より下列へと世代順に並べた。故に上の世代との間が……ならば師弟關係を、同列の間で……ならば友人關係を示す

—•→は故吏の關係を示す。

□で圍んだ人物は後曹魏政府の首腦部となつた人である。

この表は三國志卷一一後漢書卷九二及び同卷一〇〇の孔融傳等によつて作つた。

㊳三國志卷一一管寧傳參照

㊴同卷一〇荀攸傳注所引「張璠漢紀」參照

㊵後漢書卷一〇八宦者曹節傳參照

㊶士大夫も庶民も續々と避難することは三國志中到る處で記錄されている。代表的士大夫荀彧も避難したし（荀彧傳）、北海の國淵・邴原等も遼東まで避難した（國淵傳）。

㊷三國志卷二一劉廙傳注所引「廙別傳」に

廙表論治道曰。……明賢者難得也。況亂弊之後。百姓凋盡。士之存者。蓋亦無幾。

㊸三國志卷五二諸葛瑾傳注所引吳書に

初瑾爲大將軍。而弟亮爲蜀丞相。……族弟誕又顯名於魏。一門

三方爲冠蓋。天下榮之。

(44)同卷五二張昭傳及卷三八許靖傳參照。

(45)同、許靖傳末尾の注に魏略を引き、それに魏に仕えていた王朗からの三通の手紙がのせられている。彼らの魂の温かい交流がその中に感じられるように思う。

(46)三國鼎立のまゝ再び漢代の如き普遍的國家に復歸し得ないことが明白となるにつれて、士大夫の關心は政治より純粹に思想的なるものに向う。魏晉時代に盛行する清談はそれであり、これについては次の機會にのべることとし、唯宇都宮氏「世說新語の時代」(東方學報京都第一〇册第二分)及び板野長八氏「清談の一解釋」(史學雜誌第五〇編)を參照されたい。

(47)唐書宰相世系表參照

(48)趙翼「廿二史劄記」卷五「四世三公」參照

(49)外戚馬・陰・竇・梁・鄧の諸氏及び皇室と姻戚關係にある樊・耿・來・寇・岑の諸氏はその家系の永續と、中央に於て保つた累代の高位とによつて貴族として取扱うべき存在である。一々の系譜をあげることは略す。後漢書各傳を參照されたい。

(50)樊氏・陰氏は光武帝の姻戚、鄧禹はその友人であり、來氏も光武の家と親戚である。

ランス大會堂 (口繪表參照)

ランスの大會堂は、クロヴィス以來歷代のフランス王が戴冠式を擧げる會堂であつた。最初の會堂が火災にあつたため一二一一年に再建工事が始められ、完成せられたのは十四世紀の初期である。寫眞に示すのはその再建のものであつて、現存する最も代表的なゴシック建築である。ゴシック敎會堂、それは單に神の世界の象徵であるのみでなく、石材を合理的に組織する事によつて自然の法則、神の秩序を具顯するものである。從つて會堂正面を飾る無數の彫刻も亦完全に會堂建築の秩序に服している。十三世紀の西ヨーロッパ人は、人間の知性を自覺し、自信をもつて宇宙を注視し、人類及び宇宙全體についてのがい博な知識をもつた。だが彼等はその知識を神を中心とする體系に築き上げたのである。宇宙は神の攝理であり、藝術はこれを象徵する。すべての形態は數の法則、意義の系列に從ふ。我々はここにゴシック・ヒューマニズムの限界を見出すのである。